

明日への伝言

3がつ11にちをわすれないためにセンターの活動について、メディアアテークの小川直人さんと水谷仁美さんにお話を伺いました。

市民主体の震災の記録活動

被災した施設を部分的に復旧し、平成23年5月に一部再開したメディアアテーク。これに合わせ、「3がつ11にちをわすれないためにセンター（略称「わすれん」）」が開設されました。小川さんは「メディアを通じて市民の学びや活動を支える生涯学習施設として、これまでの経験を生かしたものをまず始めようと。街のシボルの施設が動き出すことで前に進むきっかけになればという期待もありました」と話します。発災からわずか2カ月足らず。市民が中心となった震災の記録活動が始まりました。

「ほかのアーカイブとは違い、写真や映像を収集することが第一義ではありません。むしろ市民の皆さんが記録し、発信することで震災と向き合うことそのものがわすれん！の中心」と特徴を話すお二人。参加者は初めて機材を触る方から映像の専門家まで幅広く、市内外からこれま



▲わすれん！の参加者の記録を利用する機会として毎年開催している「星空と路」を通して、震災を振り返り語ります

で200人以上が参加。撮影機材や作業場所が提供され、スタッフが活動をサポートしますが、撮影内容は参加者に委ねられています。水谷さんは「撮影方法を教え合って技術を高めたり、取材での出来事を共有することで活動のフィールドが広がったりするなど、参加者同士のつながりも自然に生まれました」と振り返ります。わすれん！には、被災状況や復旧現場、被災者へのインタビューなど多彩な記録が集まっています。小川さんは「報道では切り落とされてしまう小さなことや個人的な視点でも、一人一人が直面した震災の記録として意味があります」と話します。

記録を通して震災に触れ続ける

集まった記録を資料化したり、活用したりすることにもわすれん！は力を入れています。「映像に込められた思いや切実さが伝わるよう、上映には撮影者のトークを組み合わせたなど、来場者との対話の場を設けています」と水谷さん。発災直後か

ら7日間の山元町の避難所等を撮影した映像には、地元の方から「撮ってくれてありがとう」と感謝の言葉が多数寄せられたそう。「撮影した事柄に関する情報を来場者が補足してくれて、改めてその価値に気付くこともあり。何よりフィードバックをもらって撮影者はうれしいうにされていますね」と微笑みます。記録は、ホームページで公開するほか、メディアアテーク内のライブラビーでDVDを貸し出すなど、さまざまな形で活用されています。

「10年たった今だから踏ん切りがついたと新たに活動を始めた方もいます。人それぞれのタイミングでいつでも始められるように門を開いておきたい」と話す水谷さん。小川さんは「自分たちの地域に起きた出来事を、行政やマスメディアに全て委ねるのではなく、その人自身の思い、生の声で記録し、それが共有されて、また別の誰かの学びにつながる。震災の記録を自分たちのこととして触れ続けるよすがにわすれん！がなれば」と続けま



▲水谷さん(左)と小川さん(右)

平成23年5月、市民協働により復旧・復興の過程を記録・発信するプラットフォーム（活動拠点）として、せんだいメディアアテークに開設。市民が記録した映像や写真、音声、テキストなどのデータを整理・保存し、利活用しています。

ホームページ <https://recorder311.smt.jp/>

